



特別寄稿

駐日英国大使

ティム・ヒッチンズ



剣道との再会

私たちは、恐らく、その行う仕事によるよりもスポーツによって定義される方が好ましいように思う。私は、パリ、東京、パキスタン、アフガニスタンと勤務地を変えつつ、英国の外交官として30年以上を過ごしてきた。私は、英国、オーストラリアとシンガポールで育ち、十代の生活の多くを日本で過ごした。かくして、世界の人々がその選択するスポーツを通して自らを表現する多くの異なった方法を見て来た。

フランスにおける象徴的なスポーツは、自転車——特に、「ツール

・ド・フランス」——である。こ

れは、北部の寒い平原から圧倒するように険しく美しいアルプス街道を上り、プロヴァンスの熱気と芳香の地に至る、フランスの地理的驚異をなぞる偉大なレースである。フランスの文化全体がレースの中に現れる。そして、今年のレースの出发点が英国のヨークシャーである。この偉大なフランスの伝統が国際化されていることの、素晴らしい象徴である。

アフガニスタンにおいては、スポーツは、より野性的で、その国の部族の歴史に近接したものとなる。私は、恐らく今日のポロ（注…

4人一組の両チームで行うホッケーに似た馬上球戯）の原点であると思われる、荒々しく魅惑的な「ホースバック・ゲーム」（注…馬、山羊等の動物に乗って、速さを競う競技）を見てきた。すなわち、その競技では、騎手が互いに乗っている動物の鼻先を競り合い、決勝線を駆け抜けるのである。

パキスタンでは英国から輸出されたクリケットが国技であり、かつての植民地が、今や国際試合を制するに至っている。クリケットは英国紳士によって考案され、数日間続く、ひどく複雑な規則の競技であったが、オーストラリア、アフリカおよび南アジアに伝播され、広がるうちに進化してきたものである。

かくして、日本に住み、働く英国人として、私は、専門的な物事と同様に娯楽にも興味がある。私は自分自身に、英国のバックグラウンドから生み出されたものを感じる。英国人が自らを表現する英国の言い回しに「英国人は、ゲームを人生としてではなく、人生をゲームとして扱う」というものがある。

る。言い換えれば、私たち英国人は、仕事を余り深刻に捉えようとせず、スポーツを非常に真剣に、多分、過度に真剣に捉えようとする。

私はこれまで、いつもスポーツを楽しんで来た。テニス、スクォッシュ、ラグビー、ゴルフ、サイクリング、クリケット、ホッケーなどである。大使である今、思うようにスポーツに時間を割くことはできないが、私の最も楽しい経験のある部分はスポーツに関連している。すなわち、富士山の見えるゴルフコースでの素晴らしい日曜日朝、南相馬（実のところ、南相馬野球場であったが）での東北チームとのクリケット、秩父宮国立ラグビー場でのラグビー、緑樹に囲まれた箱根での早朝テニス、長野県の野尻湖での水泳などである。

これらのそれぞれは、刺激的で楽しいものであった。しかし、この稿では、私は、スポーツ以上の何かをもって私を魅了するものについて触れてみたいと考えた。すなわち、剣道である。そして、そ

これは、この素晴らしい国との私の永続的な関係を表現する何かである。

森喜朗元総理は、誰もが知るように、ラグビーの熱烈な愛好家だ。私は運良く、日本が香港を破りアジアカップを得て2015年の英国でのラグビーワールドカップの出場権を得た、5月の国立競技場に彼と居合わせた。ラグビーワールドカップは、オリンピックとサッカーワールドカップの後の第3番目に大きな国際スポーツ行事である。英国と日本は、英国での2012年のオリンピックの経験が2020年の東京でのオリンピックとパラリンピックの実施に役立つよう、特に緊密に連携し合っている。そして同時に、2019年のラグビーワールドカップを主催予定の東京と我々は、2015年の英国でのラグビーワールドカップの経験を共有すべく緊密に連携し合っているところである。日本のファンにとって、その年に世界の最高のラグビー選手を見ることは、素晴らしい経験となることと思う。

森元総理は私に、人生を「サッカーボールよりもむしろラグビーボールに似ている」と語られたことがある。サッカーボールは、軌道を見て、ボールのバウンドを予想することが出来る。ラグビーボールは、その独特の形状から、非常に予測し難い方向にバウンドする。森氏自身の人生が、幾分かの予測出来ないバウンドを含んだものであった。そして、私の人生についても全く同様の経験がある。

「日本精神を洞察させる」

私が学生時代で日本にいたとき、私の母は労働省で英語を教えていた。その優秀で若い生徒たちの中に濱田直樹という青年がいた。彼は、母と私に親切にしてくれ、後に私が日本に独りで滞在していたとき、彼と私は礼文島、利尻島まで素晴らしい1週間の長期北海道旅行を楽しんだ。彼は剣道に熱心で、東京のとある学校の早朝稽古に私を連れて行ってくれた。その後、私が若き外交官として日本に着任したときも、彼は再び私に大

変、親切に接してくれた。

しかしながら、良くあることだが、その後、私たちの人生は異なる方向にバウンドした。連絡が途絶え、私は、しばしば濱田さんのことを思い出したが、彼がどうしているかを知るすべもなかった。

その後、英国大使として2012年12月に日本に赴任し、諸大臣を表敬訪問し始めた頃、私は幸運にも田村憲久厚生労働大臣にお目にかかることができた。表敬の最後に、田村大臣の側近の方に濱田直樹という職員がいるかと尋ねた。驚いたことに、彼は同じ省内で勤務しているというのだ。運命のラグビーボールは、私の方向にバウンドして、真つすぐに私の手に飛び込んで来たのだった。

濱田さんと私はすぐに連絡を復活した。彼は年齢が60歳近くになり、公務員生活を間もなく終えようとしていたことがわかった。彼は、当面、何をなすべきか迷っていた。彼は、私が剣道を学ぶことに興味が無いかと尋ねた。

これは、素晴らしい驚きだった。私は30年以上前に、彼と早朝、学

校で見たことのある剣道を思い出した。私は、剣道が単なるスポーツ以上のものであること、そして、それが日本と日本精神を洞察させるものであること——それは、外交官としての仕事の中心となるものである——が分かっていた。私は、それが時間のかかるものだということも、そして、何か新しいことを50歳で始めようとするのだから上級者になることは期待できないということも分かっていた。私は、いつも学習者であろうとしていた。しかしながら、本を読み理解すればするほど、これ自体が、まさに大事であると分かってきた。すなわち、剣道は修得すべき何かではなく、自分がいつも進み行く途上にある何かであるということだ。

私は、始めたときから1週間に1回しか稽古ができないでいる。ほとんどの場合、毎週土曜日の朝、大使公邸のボールルームで、優雅な絨毯を巻き上げて床板をむき出しにし、竹刀や木剣がシャンデリアに当たらないように細心の注意を払う。天気の良いときは、

濱田先生と庭に出て広い芝生の上で稽古する。刈られたばかりの草の足の裏での感触は素晴らしい。私は、近隣がどう思うかについての気遣いから来る、大きな気合いを掛けることに對する気後れを克服する必要を感じている。

さらに、私には、大変、親切に受け入れていただいている二組の友人たちがいる。巢鴨の三菱道場と中野区の小澤 博先生の道場の会員の皆さんである。これら先生方と友人達のお陰で、一級と先般、初段にどうにか合格することができた。審査において背の高い、銀髪の外洋人と手合わせることになり、鮮やかでしつかりした面を打つことが難しかったであろう若い学生たちに感謝しなければならぬ。

「50歳代で学ぶ大きな謙虚」

かくして、私がこれまで剣道修練から学んだことは、次のとおりである。

第一に、何か新しく、難しいものを始めることはとても良い、し

かも、年をとっているほど良いことである。我々は、年齢を重ね、責任が増えてくると、効果や経験が無いのではないかという恐れから、確信の持てないものを敬遠しがちである。50歳代で剣道を学ぶことは、大きな謙遜を学ばせてくれる。仕事で誰かがお世辞を言うてくれることがあっても、いつも私は、「道場でまだ学ぶべきことがまだいかに多くあるかを知るべきだ」と自分に言い聞かせている。

第二に、剣道は日本人の魂につながる窓である。神棚に対する畏敬は、日本における権威に対する畏敬として、剣道の中心となるものである。イスラム教は、文字通り、アラビア語で「恭順」を意味するが、剣道は同様に、我々に我々以上の偉大な何かに対して従順となることを教えてくれる。

第三に、稽古のときに気合を出すことが、私にはとても難しく、かつとても大切だと感じている。私は生来、どちらかかと言えば内気でしかも英国人である。そのた

め、大きな声をあげることは避けて来たことのひとつである。それ故、声をあげ、私の中にある何か非常に深い、野生的なものからの表現を求められることは、容易ではなかった。私は、なお、私の原始的な部分を剣道精神の繊細さに結びつけることを何とかして学ばなければならぬ。

「感謝の哲学を楽しむ」

そして最後に、私は、自分を打突いた相手に対する感謝の哲学を本当に楽しんでる。なぜなら、相手は自分の試みようとした手段の弱点を明らかにすることを助けてくれたからだ。我々は、しばしば、批判され、自分の弱点を明らかにされることに對して防衛的になるが、私は、批判を歓迎し、受け入れる度量を持つということが大変役に立つと分かった。大使としての私は批判をものもしないようであるべきと、人々が考えていることを感じる。しかしながら、より良い大使であるべきために必要なものは、まさに、私がさらに

め、大きな声をあげることは避けて来たことのひとつである。それ故、声をあげ、私の中にある何か非常に深い、野生的なものからの表現を求められることは、容易ではなかった。私は、なお、私の原始的な部分を剣道精神の繊細さに結びつけることを何とかして学ばなければならぬ。

学ぶべきものを感じさせる建設的な批判である。

既に述べたとおり、私にはまだ歩むべき長い道がある。前進よりむしろ幾分か後退していると感じる週もある。私の先生は、剣道の稽古をしているときは自分自身が崖っぷちに立っていると想像するように、そして必ず体を前に出るか横にさばいて、決して後退することの無いようにと指導する。これは大変、賢明な哲学のように思われる。

そして、これはまた、日本が自らを振り返る良い方法のようにも思われる。すなわち、すべて後退したり、萎縮すること無く、常に前進して、自信を持って、失敗から学ぶ——そして、年齢がいくつであろうとも、学びかつ修得することを開始できると自信を持つことを。

(この稿は、英語による原文を翻訳したものです。原文は全剣連ホームページに掲載していますので併せてご覧ください)